

待望の中国語文法研究書

高更生, 王紅旗等著『漢語教学語法研究』紹介

馬 鳳 如

吹 屋 哲 夫

1996年8月, 中国で最初に中国語学校教育のための文法について全般的に論述した学術専門書——高更生, 王紅旗等著『漢語教学語法研究』(以下『研究』と略す)が語文出版社より出版された。この専門的に中国語学校文法について論述した著作の出版は, 中国語文法研究における空白分野を埋め, 中国語学校文法の研究を大きく一步進めた。

『研究』の内容, 特徴は主に次の三点からなる。一) 文法の各ランクの単位(形態素, 単語, フレーズ, 文, 文群)と, 関連する内容(学校文法, 文章, 文法標準化)のこれまでの研究発展の状況を明らかにし, 学校文法史的性質を持つ。二) 各ランクの文法単位と関連内容の現段階での研究状況と, 存在する問題及びその解決方法について研究し, 学校文法評論, 解決困難な問題についての研究書としての性質を持っている。三) より深い研究が待たれる問題に対して検討を加え, 一般の学術論文としての性格を持っている。本書は8部から構成されるが, それぞれが上述の3つの側面を持つ。

この学術専門書は, 各ランクの文法単位や関連内容の発展状況や論争点, 解決困難な問題点に客観的な分析を加えたが, 8つの側面から簡単にその紹介をする。

一 学校文法について

1. 文法教育の適用範囲を明確にした。

はじめて明確に, 学校文法が大, 中, 小学の学校文法を含み, また大学院生の学校文法を含むことを示した。「文字どおり, 学校文法が指しているのは学校教育で用いられる文法である」, 「学校文法も大学学校文法と小学を含む中学校文法に分けることができる」という新しい観点を示し, 学校文法が中小学校文法だけを含む

という観点を正した。

2, 学校文法の特徴は学校教育性であることを示した。

学校文法の特徴は学校教育性であり, それは, 実用性と受け入れ易さの2つの面を含む。実用性とは学校文法を学べば実際に役立つことを意味する。その目的は, 一定の知識を習得することにより, 何が文法的に正しく, 何が誤りであるかを理解できるようにすること, そして, 正確にことばを用いることができるようにすることであると, 著者は考える。著者はあわせて, 異なる教育対象に応じて異なる目標を定めることも学校文法の実用性の具体的な現れであると指摘する。学校文法の受け入れ易さについても教師, 学生の両面から検討しなければならないと考える。

二 形態素について

1. 中国語文法研究の中の「詞素」「語素」という術語の提示, 用い方の過程を集約した。

著者は, 「詞素」「語素」という2つの術語の成立, 発展変化の全過程を分析し, 併せて自身の考えを明確にした。実際の中国語の状況から「語素(形態素)」と呼ぶ方が合理的であると考ええる。理由は次の二点である。(1)形態素を単語やフレーズの構成要素とみなすと形態素の中国語における重要性が弱められてしまう。(2)形態素の研究は, 単語の制約を受けず, 語調, ポーズ, ストレスなど単語のレベルを超えた形態素(超語段語素)まで広げることができる。もし, 「詞素」と呼ぶと, このような形態素を含むことが難しくなってしまう。

2. 形態素を確定する剰余法を正式に中国語研究に導入した。

著者はかつて『漢語語法專題研究』において

「剰余法」の名称を示し、詳細にこれについて論じた。多くのことばの分析を通して剰余法の特徴とその変化の方向（置換）を明らかにし、形態素研究における誤りを正した。

3. 形態素を確定する音義法を示し、当面する形態素分類時における困難な問題を解決した。

現在の学校文法において影響力の大きい形態素分類方法は実際には非科学的であると著者は指摘する。現行の方法では多くの形態素の分類が難しい。音義分類法により、音声と意味の両面、10の角度から形態素を分類すれば、すべての形態素を合理的に類別できる。

4. 単語のレベルを超えた形態素（超語段語素）という観点を示し、形態素研究の範囲を広げた。

著者は形態素を、それを構成する成分によって、語段形態素（語段語素）と超語段形態素（超語段語素）に分類し、中国語の超語段形態素の意味と分類について詳細に論じた。そして、超語段形態素は、単語もしくは単語の成分として表される形態素ではなく、意味と密接な関係を持ち、語調形態素、ストレス形態素、ポーズ形態素を含むことを指摘した。あわせて、それぞれの種類の構造や特徴に詳しい説明を加えた。超語段形態素の観点により、形態素研究の新領域を開いた。

三 単語について

新しい品詞分類の基準を示し、あらたに品詞を系統づけた。

著者はすでに存在する中国語の品詞分類基準に対してそれぞれ批判分析を加え、新しい品詞分類の原則と根拠を示し、この分類法により、あらたに品詞を系統づけた。6段階の手順により15種類の品詞に分類される。とりわけ、成分詞、非成分詞の提示は、伝統的な虚詞、実詞の分類法を否定し、中国語品詞分類史に大きく貢献した。

四 フレーズについて

1. フレーズの構造類型、機能類型の発展過程を総括した。

フレーズ研究の発展過程をすべて網羅し、そ

れぞれの時代の状況や特徴について詳しく分析、論述し、あわせて、フレーズの構造類型、機能類型の分類に建設的な見解を示した。

2. 合理的に主述フレーズ、介詞フレーズ、量詞フレーズの機能類別について論述した。

主述フレーズ、介詞フレーズ、量詞フレーズを如何に分類すべきかについては文法学界でも見解がわかれている。『研究』では、深く緻密な分析を行い、合理的な解決方法を示した。

五 文について

1. 単文、複文を区別するための新しい基準を示した。

中国語の単文、複文を厳密に区分するのは容易なことではない。著者は学校文法の特徴に基づき、これまでの学説を参考にし、「構造関係を主とし、ポーズ、機能、関連語句を参考とする」単文、複文の区分基準を示した。

2. 単文複文の論争における2つの難問を解決した。

単文複文の分類でこれまで議論されてきた点として「相連ならない代称的同格」と「相連ならない分析・統括式同格」をどう分類するのかということがある。相連ならない代称同格については単文複文の区分基準で判断すべきで、語句の間に意味上の同格関係があるかどうかで判断すべきではないと著者は指摘する。同時に、機能を参考にし、同格となっている語句の、前に置かれている方の成分が名詞性か述詞性かを考慮しなければならない。名詞性なら、一般に主語とみなすことができ、単文であり、述詞性なら分句とみなすことができ、複文である。相連ならない分析・総括式同格についても的確な解決方法を示している。

3. 系統的に新しい文の分析方法を説明した。

文分析方法については著者は重点的に変換分析法、語義特徴分析法、語義指向分析法について系統的な説明を行った。そして、これら三種の方法を別々に用いて、伝統的な文分析法では解決できなかった問題を解いた。

六 文群と文章について

1. 文群分類の境界を示した。

著者は文群を複文、超文(超句)、段落と具体的に比較分析し、それらの境界をはっきりさせた。同時にいくらかの文法書の誤りを正した。

2. 文群の関連形式について詳述した。

著者は文群の関連を次の4つに大きく分類した。つまり、a) 語順の関連、b) 語順、語句の関連、c) 語順、文型の関連、d) 語順、語句、文型の関連の4類である。あわせて、文相互の関係から、文群を具体的に、並列、問答、分析、解説、順承、累加、選択、転折、因果、目的、仮説、条件、添加の13種類に分け、これらを詳細に分析、説明した。

3. 科学的に文章分析の内容と方法を論述した。

文章分析の内容、方法、意味などについて優れた見解を提示した。内容面では、一編の文章の分析と複数の編からなる文章の総合的分析、単純な文法分析と作文、修辞、ロジックなどを結合させた分析、文章全体の総合的分析と文章中の段落、文群、文、品詞、形態素についての重点的分析、異なる文体の文法分析、以上4つの角度から科学的に論述した。分析の方法では、「分析採用の方法」、「分析結果の表記法」の2点を指摘した。

七 文法標準化について

1. 文法標準化の性質と範囲を明確にした。

文法標準化の性質については、「二点を明らかにしなければいけない。第一に、現代中国語文法標準化は現代中国語発展の客観的法則に依拠しなければならない。これは最も重要な点である。第二に、現代中国語標準化の具体的役割は二つある。一つは現代中国語文法の明確で統一された基準を研究、確定することである。もう一点は、この基準を用いて現代中国語に存在する文法の誤りを除くことである。」と指摘する。文法標準化の範囲については、注意すべき3つの問題をあげ、文法標準化の範囲にはっきりとした境界をあたえた。

2. 文法標準化には中間状態が存在することを示す。

言語の発展、変異、変化には、健康的で、積極的で有益で、肯定すべき面と、不健康で、消

極的で、無益な、否定して排斥すべきものがある。著者は、これら二種の状況のほか、中間状態、中間地帯の存在、つまり、積極的か否か、健康的か否か、有益であるか否かをすぐに識別できない状況も存在することを認めなければならないと考える。これは言語の発展には必ず過程が存在するからであり、新しい文法現象は一般の人々の選択過程を必要とし、文法研究者が観察を進める過程も必要とするからである。

八 深く検討した問題

1. 真性述詞性目的語動詞(真謂賓動詞)

この術語は朱德熙氏により、1982年、示された。著者は『現代漢語詞典』『動詞用法詞典』等により、74の動詞を真性述詞性目的語動詞とした。そして文の中で、主語が現れるかどうか、状語をともなうことができるかどうか、目的語との結びつきが安定しているかどうか、等の角度から、真性述詞性目的語動詞の具体的な用法や文法的特徴を全面的に分析した。このように深く真性述詞性目的語動詞について論じたのは国内ではじめてである。

2. 等位フレーズの密着(加合)関係

『研究』は、等位フレーズがどんな影響を受けたときに密着関係を形成するのか、またこの密着関係は受けた影響の違いによりどのような異なった型になるのかを解きあかした。等位フレーズが主語、目的語として用いられている具体例の分析を通して、密着関係が形成される原因を明らかにした。そして、その原因を大きく二つにまとめた。(1)等位フレーズは文中の関連語句の影響を受け密着フレーズとなる。(2)等位フレーズは場所構造の制約を受け、密着関係を形成する。あわせて変換の角度からも具体的な分析を行った。

3. 動詞結果補語型中心語補語構造

『研究』は結果補語の意味についてもあらたな解釈を行った。同時に、文法構造の意味をまとめるときには、ロジックによる基準をとるのではなく、関連する2つの文成分が実際の関係にどう反映されているかという角度からはじめなければならないと指摘した。ほかに、補語構造そのもののみを考察することはできず、補語

の意味が指向しているもの(補語があらわす対象)も考慮しなければならない。『研究』は、意味の側面から中心語補語構造を三分し(状態式、評価式、結果式)、それぞれの意味上の違い、形式上の指標を分析した。著者はさらに動詞結果補語型の分布状況を分析し、この構造の分布を制限している意味上の要素を明らかにした。あわせて、この分布の相違を最もよく表している数種の文型を選び、それらが述語、述語中心語の位置的な分布の相違にあること、及びこれらの分布の相違と補語の意味が指向するもの間に見られるつながりについて説明した。

このほか、「見出し」の構造と「歌詞」の文法

的な特徴について合理的な詳しく論述した。これらはすべてあらたに提示された観点である。

『研究』は中国語学校文法に対する各階段、各領域、各学説の紹介と評価を含む中国語学校文法批評書であるばかりでなく、高水準の論文集であり、各学説に対する評価をもとに、それぞれの方面の課題に自身のあらたな見解を示し、これまでの多くの不合理な観点を正し、中国語学校文法の研究をさらに一歩掘り下げた。『研究』は前人未到の領域にも思い切った探求を行い、新しい発想を提起した。本書の評価の所以である。